

# 松下幸之助の宇宙観

PHP総合研究所副社長・研究担当 山口 徹



やまくち・とおる  
昭和十四年千葉県生まれ。三十七年、慶應義塾大学経済学部卒業。松下電器産業株式会社に入社後、三十九年からPHP研究所に勤務、松下幸之助のもとで二十五年間、直接指導を受ける。  
現在、PHP総合研究所副社長・研究担当  
松下社会科学振興財団評議員。中国社会科学院応用倫理研究センター客員教授。著書に、『PHP素直への道』（PHP研究所）がある。

## なぜ宇宙を考えたのか

松下幸之助の経営観の基盤にある人間観は、その著書『人間を考える第一巻 新しい人間観の提唱 真の人間道を求めて』に詳述されているように、松下が考えた独自の宇宙観を根底に構成されている。本稿ではその宇宙観の一端を、PHP研究会における松下自身の話を主な資料として紹介してみたい。

松下が、宇宙についての思索に本格的に取り組んだのは、やはり昭和二十一年にPHPの活動を始めてからのこといえよう。松下は、この年の十一月三日にPHP研究所を創設したが、最初の活動として、「自分はなぜPHPを始めたのか」ということをあちこちで熱心に説いてまわった。十二月までの六十日ほどの間に、四十三回の講演をしたことが記録に残っているが、さまざまな企業

や団体、裁判所や大学、警察や寺院などいろいろな所でPHP活動にかけるみずからの思いを熱心に訴えた。そうした中で松下は、宇宙について考えることの必要性に改めて思い至るのである。

PHP活動を始めて二周年にあたる昭和二十三年十一月のある講演で、松下は次のような要旨の話をしている。

「自分はこれまで、さまざまな所でPHPの活動について話をしてきたけれども、多くの人から、『松下さん、その趣旨は非常に結構だけれども、あなたのようなPHPを実現するには、われわれはどう考え、どう行動していったらいいのか』と尋ねられた。その時に、『それはこうしたらいい』と答えるべき確たるものが自分にはない。そこであれこれ考えた結果、これはやはり、人間の本质というものについての正しい把握をすることが、極めて大事だということに思い至った」

この人間の本质の正しい把握、つまりは人間観の確立が大事という結論に至る経緯をもう少し辿ってみよう。

松下によれば、PHPというのは繁栄、平和、幸福をより高めていこうという活動であるが、そのために必要なことはむろんいろいろある。人間社会全般にかかわることであるだけに、いわゆる人事百般、多方面にわたるさまざまな問題について考えなければならぬ。政治も大事だし、経済、経営、教育その他、各分野に関する研究が欠かせない。しかし、その根本として、最も大事なことは何かといえば、やはり、人間の本质とはいかなるものかを正しくとらえることだと考えられる。つまり、繁栄、平和、幸福を実現していくには、それを実現するにふさわしい正しい考え方に立たなければならぬが、その正しい考え方とは何かを求めていくと、何といても人間とはいかなる

ものかということについての正しい理解、認識を持つことが基本だという結論に行き着く、というのである。

このことの説明に松下はよく、「よき羊飼いは」という例を引いていた。よき羊飼いであるための要件は何かというところ、いうまでもなく羊とはいかなるものかということをし正しく知っていることである。羊とはどういう特徴を備えた動物で、どういう環境を好み、どういう食物を与えてどうい世話をするれば健康に育つのか、そうしたことについて正しく十分に知っていることが、よき羊飼いであるための基本の要件である。それを知らずに、羊の持つ特性、本質に沿わない飼い方をしたならば、元氣な羊を病気にしてしまったりして、いい成果をあげることはできない。

われわれがめざそうとしている繁栄、平和、幸福の実現というものは、他の動物や植物の P H P ではなくあくまで人間にとつての P H P である。人間社会の主体者であるわれわれは、誰かに飼われているということではないけれども、いかなれば人間社会は、お互い人間が、人間同士生かしあいをしているようなものである。

とするならば、お互いが人間とはいかなるものかということについての正しい理解、認識を持っていることがやはりその基本の条件で、それが間違っていたのでは、いくら繁栄、平和、幸福を求めてもその実現はむずかしく、というわけである。

宇宙は一大生命体である

ふつう宇宙といえば、われわれは星とか月とか太陽を思い浮かべる。しかしここで松下が言う宇宙とは、そのような天体ばかりでなく、もっといろいろなものを含んだ広い意味での宇宙である。いふならばお互い人間をすっぽりと包み込んでいふ物心両面の世界、森羅万象のすべてでもいふようか。そのような宇宙がどのような本質を持っており、いかなる動きをしているか、それについて考察してみることが、人間とは何かを考える上で不可欠だ、と松下はいふ。

松下はまず、宇宙というものは、時間的にも空間的にも限りのない、いわゆる無始無終、広大無辺の一大生命体である、という見方に立つ。

宇宙が時間的に見ていつ頃から存在したのかということについては、今日の科学ではおよそ一五〇億年前といわれている。しかし、人間の文化が始まってからまだようやく一万年ほどといわれているし、望遠鏡が発明されて宇宙の観測が行なわれるようになってからは、わずかに四〇〇年ほどしかたっていない。だから現在の科学では、一五〇億年前ということ自体がまだ不確かだ、それは今後の研究によつてより確かなものになっていくであろうが、かりに宇宙の歴史が一五〇億年であるとしても、それは人間の想像を絶するはるかな年月であり、ほとんど限りのない期間のように思われる。また同様に、この宇宙の終わりというも

昭和二十二年に創刊され、今日まで P H P 活動の機関誌として発行されてきている月刊誌『P H P』の表紙裏には、毎号「P H P とは」と題して簡略な説明が載っている。それは、「P H P とは Peace and Happiness through Prosperity」の頭文字で、「物心両面の調和ある豊かさによつて平和と幸福をもたらそう」という意味です。お互いが身も心も豊かになって、平和で幸福な生活をおくる方策を、人間の本質に照らしつつ、それぞれの知恵と体験を通して提案し考えあいたい。そんな願いのもとに月刊誌 P H P を発行しています」といふものであるが、P H P 活動においては、創設間もない頃から「人間の本質に照らしつつ」ということが大事な基本的要素として考えられてきているのである。

ところが、この人間とはいかなるものかを考えるにあたっては、その前に、人間の生活の場になつている宇宙というものについて考えておく必要がある、というのが松下の考えであった。それはどうしてかといえば、人間はこの広い宇宙において、人間単独の力で存在しているのではなく、宇宙自体の営みの中から生まれてきたものだと考えられる。したがって、その人間のいわば生みの親である宇宙についてまず考察し、その宇宙の中で人間がどのようにして生み出され、生かされるようになったのかを辿つておくことが、人間の本質を考えるにあたっては一つの重要な要素である、といふのである。

のも、もしあるとしてもそれはわれわれが考える時間でははかりしれないほど遠い先のことであり、いわば無終とみなすことができるだろう。

また、宇宙の広さ、空間的な広がりについて考えてみると、今日の科学では、地球が属している太陽系のようなものは、他にもたくさんあり、それらが一つの集団となって円盤状の銀河系をつくっているという。この銀河系には約二千億個の星があり、その直径は約一〇万光年だという。一光年は約九兆五千億キロメートルであるから、その一〇万倍といえば、これまた想像を絶する長い距離である。しかもそうした銀河系のようなもの他にもたくさんあって、なかには一兆個の星を持つものもあるということであるから、それはもはや広大無辺としかいいようがない広がりであるといえよう。

そしてこのように無始無終、広大無辺の広がりを持つ宇宙を松下は、いわゆる生命体、つまり生命を持った活動体ではないかと考えた。

ふつう生命体といえば、人間とか動物とかの生物をさす。しかし、松下が宇宙が生命体であるという場合の生命体とは、それよりはるかに大きく広い内容を持っている。

松下は、個々の生物の生命と宇宙の生命とは、人間そのものの生命とその人間を形づくっている一つ一つの細胞の生命との関係のようなものではないかという。

人間の肉体は、何兆個、何十兆個といういわば

無数の細胞によって成り立っている。その個々の細胞の中には、一つの生命体として、刻々に生まれ、活動し、死んでいくものが少なくない。しかし、それらの細胞によって成り立っている人間は、個々の細胞の生死には関係なく、生命体としてある期間活動を続けていく。したがって、個々の細胞からすれば、人間の肉体は、一つの宇宙のように見えるであろう。

これと同様に人間は、宇宙から見れば、一つの細胞のような存在である。しかも、宇宙は、広大無辺の広がりを持っており、その中に人間や動物はもとより、さまざまな生命体を含んでいる。たとえば石や山は常識的には生命体ではないが、それ自体がやはり宇宙という大生命体の一部である。

人間の髪の毛や爪は、切っても血は流れない。痛みも感じない。だから生命体ではないようにも思われるが、実際は人間という生命体の一部である。一見、何の動きもないようでありながら、爪は生え、髪は伸び、時に白く変化するという営みを続けている。石や山は、昨日と今日とはもちろん、十年前、百年前ともほとんど変化がないように見える。しかし、無始無終である宇宙のきわめて長期にわたる営みの中では、刻々に変化し、活動しているといえる。そのようなことから、太陽や月や星や、人間や動物や無生物など、この宇宙に存するすべてのもの、そして宇宙それ自体も、みなそれぞれに生命体であると考えていいのではないか、というのである。

日に新たな生成発展をめざす大意志

そして、そのように無始無終、広大無辺の大生命体としての宇宙は、大生命体としての大きな意志を持っている、と松下はいう。それはもとより、私たち人間が持っている意志と同列に論ずることができるものではない。人間の意志はその生活の中でことばで表現されたり行動で示されたりするから、その存在がよくわかる。けれども、宇宙は人間のように語らないし、文字も書かない。ただ、星が運行し、太陽が輝き、風が吹き、雨が降るといった営みを淡々と続けているだけである。だからわれわれは、宇宙の意志の存在を、人間のそれのように認識できない。しかし、宇宙の営みには、宇宙の大意志が、いわゆる宇宙の法則、自然の理法として、あまねく働いていると考えられる。そしてその大意志は、宇宙全体を無限の過去から無限の未来に向かって、刻々に限りなく生成発展させていこうとしているように思われる。いいかえれば、生成発展こそが自然の理法であり、宇宙の意志の発露である。そう松下は考えるのである。

なぜそういえるのだろうか。宇宙の営みは、生成発展ではなく衰退消滅の方向に向かっていくという見方に立つこともできようし、あるいはその営みは単なる変化であって、発展とか衰退といった方向を考えるのはどうかといった疑問も湧くだろう。確かにその通りで、宇宙についてのこうし

た見方は、生命体であるかどうかという問題も含め、科学的、客観的に証明できるものではなく、結局は人間が考え、判定すべき哲学的な問題であると考えられる。

この点について松下は、この宇宙の姿、変化の姿を素直にありのままに見るならば、やはり生成発展が宇宙の大意志であり、自然の理法だと考えた方が妥当だと思つ、といふ。

たとえば、この宇宙に人間が存在していること一つを考えてみても、もし自然の法則が衰退消滅であるならば、人間がわざわざこの地球上に生まれてくる必要はないはずである。人間に限らず、生物という生物は、別に生まれてくる必要はない。ところが実際の地球には、人間をはじめさまざまな生物が発生し、しかもそれが逐次進化を遂げてきている。それはやはり、宇宙の大意志が生成発展を意図しているからで、そう見る方が、物事の真実がより浮かび上がってくるような気がする、と松下はいつのである。

親から親をさかのぼっていくと……

次に松下は、刻々に生成発展の営みを続ける宇宙において、人間やその他の生物が、どのようにして生まれてきたのかということについて考えを巡らす。

今日、人間はすべて、それぞれに親から生まれている。そして親はまたその親である人間から生

まれたものである。しかし、それはさかのぼっていけばどこまでも無限に続くのかというと、そうではないであろう。というのは、地球自体の誕生が数十億年前といわれているし、その頃の地球の状態は、人間はもとより一切の生物の存在を許すものではなかったと考えられるからである。

ところがその自然条件は、何十億年という長い間に宇宙の持つ大意志によって次第に生成発展を遂げてきた。そして、その遠く長い過程において、さまざまな自然条件が整い熟してきた時の、その状態その状態に応じて、草木や動物そして人間が発生したと考えられる。

もっともそれはおそらく、あらゆる生物が一度に発生したということではないであろう。もろもろの植物なり動物は、自然の条件の変化にしたがつて、それぞれに適った条件が生じた時に、逐次発生してきた。人間も、そのような過程の中で、人間だけを発生せしめる条件が整った瞬間、それが一年か二年か、あるいは何十年という間かは別にして、そういうある期間に発生したが、それは、地球上の一方所においてだけでなく、いろいろの場所に時を同じくして起こったと考えられる。その時の、人間を発生させるような状態は、どの場所においても大体は共通していたであろうが、すべての条件がまったく同じだったのではなく、場所によっては気候風土などに多少の差異があったであろう。そうした地域的な条件の差異によって、同じ人間の中にも、さまざまな人種が生じたので

はないか。

このように、地球上においては、その状態が次第に生成発展する過程で、もろもろの生物が発生するような自然条件が熟してきて、一定の条件が続く期間内には一つの生物が発生した。そしてそれ以後の時期にはもうその生物は発生せず、他のものが発生するということが続いて、今日見られるように無数の生物が存在するようになった。

そして人間やその他の生物を発生させた諸条件は、ある期間がたつた後では移り変わってしまった、それ以後はそれぞれの生物が発生するということはなくなった。その代わり、人間にはいわゆる自生作用というが、みずから子どもを生み、種族を存続させる能力というものが与えられた。またそこには人間を発生せしめた諸条件に代わって、人間を維持存続せしめるような条件が生じてきて、それによって人間は人間によって生まれるということかたちにおいて今日まで続いてきた。それは他の生物についても同様であろう、というように松下は考えたのである。

「宇宙根源の力」と「生命力」

ところで、この生物発生過程で松下が重視していた一つのポイントがある。それは、人間なりその他の生物なりの本質や特性といったものは、最初にそれぞれのものが発生した時に、それを生み出した自然の諸条件によってすべて与えられて

いたのではないか、ということである。その自然条件は、それぞれの生物が発生した時々で別々のものであったわけだから、そこから与えられた本質も、おのずとそれぞれに特有のものであったはずで、人間も万物も、はじめから他の生物とは異なつた独自の特質を持つてこの地球上に発生した。そしてその本質は、親から子へ、子から孫へと次々に受け継がれ、今日まで一貫して続いてきている、といつのである。

また松下は、この宇宙にそのようにして万物が発生し、それらがそれぞれに存続してきている背後には、それを可能ならしむる何らかの力がなければならぬと考へた。万物を生み出し、これを日々動かしている根源の力がなければならぬ。そのような力の存在を松下は想定し、これを「宇宙根源の力」と呼んだ。太陽も月も地球も、木も草も岩石も動物も、そして人間も、いつさいのものはこの宇宙根源の力によって生み出され、動かされている。さらには、私たちが住む太陽系のよなものをいけば無限に含む大宇宙そのものが、この力によって造られ、支えられ、動かされている、といふ。

さらに松下は、それはいいかえれば、宇宙に存在するすべてのものには、宇宙根源の力によって、それぞれに「生命力」というものが与えられているといふことではないか、と考へた。生命力とは、ふつうにはいわゆる生き物だけが持っていると考えられているが、これを、「そのものをして存在せ

しめ、刻々に生成発展させていく力」と考へるならば、それぞれのものには生物であると無生物であるとを問わず、すべてに生命力が備わっているといえるだろう、といつのである。

人間をはじめとするもろもろの生物に生命力があることは改めていうまでもない。たとえば樹木でもたえず枝葉を伸ばそうとしているし、根も深く地中に分け入ろうとしている。進む方向に岩があれば、その岩を割つてでも根を伸ばし、必要な養分を吸い取つて生き続け、成長しようとしている。動物でも同じである。

そのような生命力が、無生物にも備わっていると考えられる、と松下は言つた。たとえば石や砂、水や空気について考へてみると、これらはそれらを構成する分子から成り立っていて、動植物のように生きよう、伸びようとする明確な動きは見られない。しかし、これらの分子が結びついて石なり空気なりを形づくるといふことは、そこにそうならしむる何らかの力、エネルギーが働いているからであろう。そのエネルギーは、それらのものが構成されてからもたえずそのものの内部において働き続け、石なら石、空気なら空気として存続せしめようとしているし、動植物ほど眼に見える形ではなくともそれぞれのものを少しずつ変化させてきてもいる。そのように、この世の中の万物には、そのものをして存在させ、時々刻々に変化発展させる生命力というものが与えられている。

そしてこの生命力の内容について松下は、もの

ごとを生成し発展させる働きに加えて、もつ一つ重要な働きがあることに着目する。それはどういふ働きかといえ、それぞれのものにいかに生きるか、いかに存在するかという、固有の生き方、存在の仕方を与えるということである。つまり松下によれば、万物が持っている生命力は、そのものを生かし、存在させる原動力であると同時に、そのものの生き方、存在の仕方を定める働きを有しているといつのである。

このように生命力に二つの働きがあると考えることによって、万物にはそれぞれ異なつた特質、生き方が与えられているという見方ができる。木には木の、魚には魚の生き方が与えられているし、岩石には岩石としての特質が与えられている。また同じ木であっても、松と杉ではその特質の与えられ方が違つし、岩石でもさまざまな種類ごとにそれぞれ異なつた特質が与えられて、それぞれ独特のものとして存在している。よく、この世の中に、まったく同じ人、同じ物はないといわれるが、それはこうした生命力の働きがあるからで、それによつて犬は犬として、猫は猫として、また同じ犬でも一匹一匹それぞれに異なつた犬として、その特質に応じた生き方をしていて、というわけである。

これはすなわち、人間なりその他の万物は、それぞれの発生にふさわしい自然条件が整い熟した時に、それぞれ独自の特質を持って生まれてきたが、それは生命力というものが、その時々宇宙

根源の力から、いわば天与のものとして万物に与えられたということに他ならない、ということである。

## 宇宙の法則の二つの側面

ところで、松下によれば、われわれが住んでいる地球はもとより、太陽系を含む宇宙の中にあつて、万物に生命力を与えてこれを生かし、生成発展の姿を生み出しているのがいわゆる「自然の理法」というものである。この自然の理法は、前述の「宇宙根源の力」の働きそのものであるが、これが宇宙の万物に対していわば数限りない働きかけをして、それぞれのものにみずから与えた生命力を生かし、生成発展の営みを可能にしていると考えられる。松下は、この自然の理法の働きは、一定の法則として宇宙の隅々にまで行きわたつており、それは「宇宙の法則」とも呼べるものだが、**という。そしてこの宇宙の法則は、大きく二つに分けて考えられるという。**

それはどういついことかというところ、この世の万物は、宇宙根源の力によつて、物の面と心の面をあわせ持つ存在としてつくられており、従つて万物に働く宇宙の法則も、物の面に働く「物的法則」と、心の面に働く「心的法則」の二つに分けてとらえられるのではないかと**いついことである。**

まず、物的法則であるが、これはたとえばニュートンが**りんごの落ちるのを見て発見したという万**

有引力の法則のような、ふつと自然科学の法則と原理といわれているものである。人間の肉体でも、これを物質と見れば、やはりこの物的法則によつて左右されていると考えられる。

原始の時代においては、人間は自然の現象を、ただ形にあらわれたそのままに受け取つていた。たとえば水が流れ、木の実が落ちるといふことにしても、それはただ何がなしにそつなつていてといふことであり、そこに働いている一定の法則には気づいていなかった。雷が落ちるといふことも、それが電気による現象であることがわからず、山の神の怒りであるといつた**とらえ方をしていた。**ところがやがて人間は、それらは**実は一定の法則に基づいて引き起こされるものであることに気づくようになった。**つまり、万有引力の法則とか電気の原理など、この宇宙に働いている法則、自然の理法の働きを次第に発見して、それらを基礎にさらに新しい法則を発見し、人間生活の上にもこれを積極的に活用するようになってきた。それらが**ここでいう物的法則である。**

もつとも、人間がこれまで物的法則を次々に解明してきたといつても、それはまだごく一部に過ぎない。自然科学が発達し物的文化が急速に発展した**とはいつても、それはごく近年のことである。**万有引力の発見は今から三〇〇年あまり前のことであるし、電気が発見されてからでもまだ二〇〇年である。ましてそれらの原理が人間生活に本格的に活用されるようになったのは、せいぜいこの

一〇〇年ほどのことであると考えられる。人間が誕生してからの長い歴史からすれば、ほんの束の間の短い時間である。だからその間に解明された物的法則は、宇宙の法則の中のごく一部分であつて、まだ未知の部分が**いわば無限にあるといつてよいだろう。**しかし、いづれにしてもこの宇宙にそのような物的法則が働いているのは確かだと考えられる。

一方、心的法則であるが、これは要するに心に働いている法則である。心とは、物に対する心、物心一如といふ時の心であつて、常識的にいへば人間が持つ**ている心のことである。**

われわれ人間は物と心、つまり肉体と精神とによつて成り立つて**いる。**眼に見える物質としての肉体と、眼に見えない微妙な心の働きというものの二つである。そして、物である肉体の方には、物的法則が働いており、医学とか生理学とかの学問はこれを解明していく**ものである。**

一方、心の働きといふものは、まことに微妙で、古来、千変万化つかま**えどころのないもの**のように考えられてきている。他人から同じ言葉を聞いても、怒る人もあれば喜ぶ人もある。物をもらつても、喜ぶ時もあるれば不平を言つ時もある。喜怒哀楽さまざま**な心の移り変わり**が人それぞれに、またその時々**にある。**

こつした複雑微妙な心の働きに対して、古来、幾多のすぐれた先人が、それぞれの経験に照らしてさまざまな貴重な教を残してきている。釈迦

やキリストは、そうした人間の心の働きについての深い理解者であったと考えられる。その当時の社会情勢や人心を深く洞察して、みずからも非常に苦心、苦勞を重ねた結果、人間の心の働きについて、これを一つの宗教的な教えとして人々に説き、多大の影響を与えた。そのような宗教的な教えのほかにも、哲学や倫理学などにおいて、いろいろな人が心の働きについて解き明かす努力を続けてきた。しかしそれらのいずれも、人間の深奥な心の働きを、教えとして説いてはいても、物的法則と同じような意味で、一つの法則として説くという姿ではなかったのではないかと、この松下の見方であった。

その点を松下は、宇宙の法則は物的法則と心的法則の二つの形をとって、表裏一体、あい併行して万物に働いていると考えたい、という。

人間の心に心的法則が働いているということとは、現在のところいわば推測である。だから、物的法則のように具体的な例を示すことはまだできないし、物的法則と同じような形をとっているのかどうかもわからない。しかし、人間の心にも自然の理法が、心的法則として働いているという認識に立って、改めて先人の教えを振り返り、さまざまな角度から新しい学問研究が積み重ねられていくならば、次第に人間の心に働く心的法則が明らかになってくるのではないかと。そしてそのことが、お互いの繁栄、平和、幸福を高めていく上で大いに役立つのではないかと、松下はいつ。

存在を信じて発見に努めたい心的法則

ところで松下は、この心的法則について、もう一つ大事な問題があるとして一つの疑問を呈している。それは、心的法則は人間の心にだけ働いているものなのだろうか、ということである。

松下はこれに対する自分なりの結論として、心的法則は人間の心にだけ働いているのではなく、宇宙に存在するすべてのものに、人間に対するのと同様にその作用を及ぼしていると考えられ、ここが非常に大事なところだと思つ、といっている。

これまでのわれわれの通念は、いわゆる心の働きは人間だけ、あるいは広く見ても動物にだけあると考えてきている。たとえば、人間の心、犬の心とはいつても、木の心、石の心とは、擬人化した場合はともかく、実際にあるものとしてはあまりいわない。そういうものには、人間と同じような心の働きはないと考えるのが一般的な通念である。従つて、かりに人間には心的法則が働いているとしても、木や石に心的法則が作用することはありえない、と考えるのがふつうである。

しかし、だからといってそれらには心的法則は作用していないとい切れるのか。必ずしもそうではなからうと松下はいうのである。それはどうしてかという点、これまで説明したように、宇宙は万物をして生成発展せしめるという大きな意志を有していると松下は考えていた。その意志が宇宙の法則として万物に作用しているわけであるが、

そのことを真に理解認識するためには、宇宙の法則を単に物的法則の面だけでとらえたのではなく、物的、心的二つの法則が、表裏一体として万物に作用していると考えべきではないか、というのである。

これまで人間は、物的法則の面だけはある程度認識し、発見してきたけれども、心的法則の面については、これをほとんど認識してこなかった。従つて今後、この心的法則を解明し、認識していくことができれば、より大きな生成発展を生み出すことも可能になるのではないかと。初めからないと決め込んでいたのでは、あるものでもなかなか発見できない。心的法則についても、まずこういうものが存在しているという認識に立って、事物を見直してみる。そうすればこれを逐次発見することができて、物的法則を究めることによって物的文化をより高めることができたように、心的文化についても、より高いものを生み出していくことができるのではないかと、松下は考えていたのである。

種なしみかんと人間のよき栽培法

この心的法則の解明と活用ということについて、松下の意図が具体的に語られていると思われる研究会での発言を紹介しておこう。

「まあぼくが子どもの時分には、紀州みかんでも、

種がたくさんあった。もう種が三十も四十も出て

くる。ところがこのごろのみかんは種がないですわな。それは要するに、みかんの栽培法に、ある一つの法則を用いているわけや。それは宇宙の法則である。心的法則か物的法則かははっきりしないけれど、一つの法則を研究し見出して、それによったから進歩した。もう今後は、種のあるみかんにまた戻るといふことはないとほくは思う。

そこで、人間自身を考えてみて、人間自身の栽培法というものを考えたらいいわけやな。人間にも要するに、みかんの栽培法のような法則を加えたら、種のないみかんができるごとく、向上した人間がズーッとできてくる。その法則をみつければいいわけやな。

ところが、みかんの栽培法というふうなもの、これもまあ一つの法則であるけれども、それは人間の知恵で考えられるくらい、比較的簡単に察知しうる法則である。けれども、人間という高等動物を種なしにするには、ほんとうの法則、といつてもウソの法則があるわけやないけれど、さらに進んだ法則が必要だといふことになる。しかし、その法則はただ何ら研究されていない。だからその法則を考えよう、少なくともそつ法則があるんだといふことを、まずわれわれは考えようといふわけや。そつ法則、基本的な観念をつくるつ法則といふわけや。そつ法則とお互いの心が、だんだん心的法則といふことに傾いてきて、今まで見えなかつた心的法則も目に見えるようになつてくる。そして、ああ、これには

的確な法則が働いているな」と分かつてくる。ここが非常に大きなポイントやと思つた。

今から四百年ほど前に、太閤秀吉といふ男が出た。その秀吉がまた木下藤吉郎といふ名で信長に仕えていたころ、城の石垣が崩れた。戦国時代のことだから、石垣が崩れるといふことは、防衛が弱くなるといふことやな。だからこれは一日も早く直そうといふことで、ある武将が奉行に任命されてやつておつたところが、いふこつにはかどらない。それで信長が怒つて、「こんなバカなことはない。いったい何をしとるのか」といふことで藤吉郎を呼んだ。「おまえ、あれをひとつやらんか」「はい、やりましよう」「どのくらいかかるか」「まあ三日あつたらこしらえます」「そんなバカなこと。一月かかつてできないものが、三日でできるか」といふて怒られたけれども、まあ藤吉郎に任された。すると彼は三日でしあげてしまった。

それはどうしたのかといふと、彼は要するに、人に何人という制限がないから、たくさんの人を集めた。とにかく戦争に負けたらいかんから、人よりも早くすることが大事や。だから、つまりたくさんの人を集め、これを十なら十に割つて、大きなそれぞれの組に班長をつくつてやつた。松下電器の事業部制と一緒やな。(笑)それで大きな賞を与えることにした。そつすると、もうみな夜おしやるわけだ。それで「タツ」と三日でできた。

藤吉郎はやっぱり心理学をやっているのやな。(笑)人間といふものは、こつこつこつを百人が百

人とも好むものであるといふ分析を、ちゃんとしたわけやな。彼は偉大なる心理学者や。そつこつこつは体験によつて感知できるのやな、早くいへば。

そつこつこつ心の動きを知るといふが、心の学問といふものは、普通の自然科学の学問とはちよつと違つところがあるね。自然科学のほうは機械的にできる。十時間やれば十時間やつただけの効果がある。しかし、心的学問といふのは時間に正比例しない。これはやつぱり、ひらめきやな。人間の心の動きといふのは妙なもので、だから心の学問といふものは非常にむずかしいと思つた。(中略)機械的ではなく、まあ非常に推知的やな。そつこつこつもの考え方が必要になつてくる。そつこつこつ動きができなかつたら、要所をつかめないとと思つた。

(『松下幸之助発言集』第四十三巻「PHP研究会抄録」一九九頁より)

引用が長くなつたが、ここに示されているように、松下の宇宙への関心は、自然の理法にしろ生命力にしろあるいは物的、心的法則にしろ、いずれも現実の日々の生活にとつすれば繁栄、平和、幸福をより多くもたらせるかといふことに直接結びついていたように思われる。

### 宇宙観から人間観へ

以上、本稿で紹介した松下の宇宙に関する見方考え方を改めてまとめてみよう。

まず松下は、われわれ人間の永遠の願いともい  
うべき繁栄、平和、幸福の実現のために大切なこ  
とはいろいろあるけれど、その根本は、それらを  
実現していくにふさわしいものの方、考え方に  
立つことである、と考えた。そしてその前提とし  
ては、お互い人間が人間みずからを正しく知ると  
いうか、いわゆる人間観を正しく確立することが  
必要で、そのためには人間が生まれ住んでいるこ  
の宇宙について考察する必要があるとして、宇宙  
について次のようなことを考えた。

すなわち、この宇宙というものは、「宇宙根源の  
力」によって生み出され、動かされており、空間的  
にはもちろん、時間的にも無限の広がりを持つ一  
大生命体である。それは刻々に生成発展している。  
この生成発展は、宇宙そのものが持つ大きな意志  
ともいうべきものであり、その意志のもとで宇宙  
自体が生成発展し、その過程で人間はじめいつさ  
いのものが逐次発生してきた。そしてその生まれ  
てきたすべてのものの上にも、宇宙の意志が「自  
然の理法」として働いている。それは具体的には、  
それぞれのものに与えられている「生命力」とし  
て、また「物的法則」及び「心的法則」として働  
いている。この生命力は、生物であるか無生物で  
あるかを問わずすべてのものに与えられていて、  
それらを生成発展せしめる原動力であり、同時に  
それらのものの存在の仕方なり生き方、いいかえ  
ればそれぞれのものの特質、使命を明確にするも  
のである。そして、そうした生命力を万物がそれ

それ十分に発揮できるような条件、環境を整えて  
いるのが、物的法則であり心的法則である。

松下はP H Pの研究を始めてから宇宙についての  
の思索を重ね、大体以上のような考え方を持ってい  
たわけであるが、この宇宙観に基づいて人間を考え

① 案 内

「P H P政策研究レポート」

P H P総合研究所第二研究本部では、政府の  
政策を常にモニターし、民間・独立の立場から  
政策情報を発信していくための紀要『P H P政  
策研究レポート』を九八年一月より月二回発行  
しています。

現在の日本が閉塞状況に陥った原因の一つに、  
政策情報の閉鎖性、画一性、偏在の問題があり  
ます。昨今のような苦難の時代であればこそ、  
行政は積極的に情報公開し、民間に広く新たな  
アイデアを求めることが大切となってくるはず  
です。当誌はその一案となるべく、既存の発想  
にとらわれない政策案を構想、提案していきたく  
いと考えてます。

既刊のテーマは下記の通りで創刊以来、毎号、  
マスコミ・政治家・有識者や全国自治体等に送  
付しており、次第に問い合わせも増えておりま  
す。

経営を考えていた。宇宙根源の力から人間に与えら  
れた人間独自の生命力とはどういうものかを考え  
そこから「人間は万物の王者である」という松下独  
自の人間観が生まれてくるわけだが、それらの点に  
ついては稿を改めて紹介することにした。



《最近号の主なテーマ》

- 第12号 / 政策評価とサンセット制度
- 第13号 / 政策評価導入への基本的取り組み
- 第14号 / 政策評価と公会計制度改革
- 第15号 / プロジェクトの経済的・財務的評価  
と意思決定
- 第16号 / デフレ・スパイラル型不況と地方自  
治体の危機